

## 学会印象記

### 第 21 回日本エイズ学会学術集会印象記

古 西 満

*Mitsuru KONISHI*

奈良県立医科大学感染症センター

第 21 回日本エイズ学会学術集会は 2007 年 11 月 28 日から 3 日間、広島大学の高田 昇先生を会長として広島国際会議場で開催された。特別講演 2 題、教育講演 10 題、シンポジウム 19 セッション、セミナー 12 セッション、一般演題 335 題と充実したプログラムが組まれていた。「Step up! 情報と教育」のメインテーマに相応しく、多くの情報を持ち帰ることができた有意義な学術集会であった。

今回、私が参加できたセッションの中で印象に残った発表を紹介する。紙面の都合で限られた演題だけになっているが、興味深い発表が他にもたくさんあり、抄録集を読み返してみると意外な発見ができると思う。

#### 1. 日本エイズ学会アルトマーク賞

第 3 回・第 4 回日本エイズ学会アルトマーク賞は、「日本における HIV 感染症の臨床および臨床研究体系の構築」で東京大学名誉教授島田 馨先生と「エイズに対する治療法の研究・開発」で熊本大学教授満屋裕明先生が受賞された。

島田先生はご都合がつかず、国立国際医療センター ACC センター長である岡 慎一先生が代わりに登壇され、島田先生の業績を紹介された。島田先生たちが HIV/エイズ診療を始められた頃は、現在とは比べものにならないご苦労があったものと想像され、そのご努力がわが国の HIV/エイズ医療の礎となっていると感じた。機会があれば、是非とも島田先生ご自身のお話を拝聴したいものだ。

満屋先生は、「カッコいい若き AIDS 研究者へ—そして AIDS と闘う全ての人達へ：エイズ治療薬研究・開発の長い道で—」と題した受賞講演を行なわれた。満屋先生の業績はとても有名だが、その道のり、特に共に研究に取り組まれた仲間たちとの出会いについて語られた。その中に若い研究者たちへの熱いメッセージがこめられており、感銘を受けた。

#### 2. 抗 HIV 治療

抗 HIV 治療は、新たな薬剤の発売やエビデンスの集積によってガイドラインの改訂が重ねられている。その中で抗 HIV 治療は、1 日 1 回服用が可能な薬剤がトレンドとな

りつつある。しかし、わが国ではそれらの薬剤の有効性や安全性に関する情報がまだまだ少なく、各施設からの報告が待たれる状況である。

神村先生 (OS04-25, 国立国際医療センター) からは、ATV で治療を開始したナীব症例 125 例の治療効果は良好であり、CD4 数が 200/μl 未満の症例でも 48 週で HIV-RNA 量 50 コピー/ml 未満は 93% (OT) であることが報告された。遠藤先生 (OS04-26, 東京大学医科学研究所) からは、ATV 長期投与症例においても良好なウイルス学的効果を維持することが示された。矢崎先生 (OS04-27, 国立国際医療センター) からは、FPV は有害事象も少なく、治療効果も期待できるので、選択機会が増えていることが報告された。奥村先生 (OS04-28, 名古屋医療センター) も FPV はプロフィールが似ている EFV に比べ、服薬の継続がしやすいことを指摘した。白阪先生 (OS04-30, 大阪医療センター) は、TVD (TDF/FTC) の安全性・有効性が海外報告と同様であり、サルベージ症例でも有効であると報告した。

昨年 12 月に DRV がわが国でも発売となり、PI ベースでの抗 HIV 治療は、1 日 2 回服用の LPV/rit, DRV もしくは 1 日 1 回服用の ATV, FPV のいずれかが主に選択される状況になると考える。これらの薬剤の使い分けを治療効果だけでなく、安全性、忍容性、耐性などの観点から確立していくことが今後の抗 HIV 治療における課題の一つであると思う。

#### 3. 日和見合併症

HAART によって HIV 感染症の予後が劇的に改善したことは周知の事実である。しかし、HAART が充実してきた今日においても HIV 感染症に関連した日和見合併症の問題は解決した訳ではなく、わが国では新たな局面を迎えている。

シンポジウム 01 は、安岡先生 (長崎大学) がオーガナイザーとなり、「HAART 時代の日和見感染症—残された課題—」と題して HAART 時代に問題となっている日和見合併症に焦点をあてたものとなっていた。新規 HIV 感染者の約 3 割が「いきなりエイズ」症例であり、ニューモン

スチス肺炎（PCP）の頻度が高く、早期診断の重要性が指摘された。堀場先生（東埼玉病院）はエイズ関連 PCP の診断には胸部画像所見も重要であるが、現病歴や既往歴を含めた臨床情報から HIV 感染症を早期に疑うことが必要であると述べた。HAART 導入以降は自然発症の非結核性抗酸菌症（MAC 症）が減少しているが、免疫再構築症候群（IRIS）として発症する MAC 症が増えていることを照屋先生（国立国際医療センター）が報告した。エイズ関連悪性リンパ腫が増えており、その死亡率は高く、萩原先生（国立国際医療センター）は HAART を併用した積極的な化学療法が必要であると指摘した。

一般演題にも悪性リンパ腫に関する発表が多く、後藤先生（OS01-1, 大阪市立総合医療センター）、宮川先生（OS01-3, 熊本大学）、高山先生（OS01-4, 北里大学）、菊地先生（OS01-5, 東京大学医科学研究所）、加藤先生（OS01-6, 東京慈恵会医科大学）から貴重な症例報告があった。また、立川先生（OS01-2, 国立国際医療センター）、四本先生（OS01-7, 長野赤十字病院）、味澤先生（OS01-8, 駒込病院）からは、治療経験の集積結果が報告され、エイズ関連悪性リンパ腫の標準治療を確立する上で有意義なものであった。

#### 4. その他

吉村先生（OS18-132, 横浜市立市民病院）は、初診時 65 歳以上の HIV 感染者 13 名についてまとめ、2 名の急性期症例がいたことを報告した。当たり前ではあるが、高齢者も新たに感染するリスクをもつことを注意喚起する、目から鱗が落ちるような内容であった。善本先生（OS18-134, 奈良県立医科大学）、菅沼先生（OS18-135, 駒込病院）は死亡症例を検討し、HAART 導入後にはエイズに関連しない悪性腫瘍での死亡が増えていると発表した。相野田先生（OS43-300, 駒込病院）は、1 年以上自己判断で外来通院を中断後に再受診した症例 25 例について検討し、再受診時には 15 例でエイズを発症し、そのうち 3 例が死亡したと報告した。いずれの発表も HIV 感染者を診療する上で示唆に富む内容であった。

本田先生（OS30-216, 国立国際医療センター）は、LPV/rit 投与症例 517 例の治療効果・副作用を検討したところ 50 歳以上では 8.6% の頻度で不整脈を認め、多くは服薬中止により可逆性であったと報告した。古谷野先生（OS37-258, 旭川医科大学）からは、ATV による尿路結石で治療変更を余儀なくされた症例が呈示された。このように今後も HIV 感染症診療を行なう中で、新たな副作用が見出され得るので、その情報を学会などで公表することは臨床医にとって重要な責務であると感じた。

我々の施設では、これまで HIV 感染者の代謝異常について注目して検討を行い、骨代謝異常、脂質代謝異常、リ

ポジストロフィー、動脈硬化などに関する報告を行なってきた。今回、九州医療センター免疫感染症科から、骨粗鬆症の評価（OS30-213, 高濱先生）、脂肪肝と抗 HIV 治療に関する検討（OS30-214, 安藤先生）、脂質代謝異常と高分子アディポネクチンの関連（南先生）について 3 題の発表があった。いずれの報告も抗 HIV 治療中の長期管理において重要な課題であるにもかかわらず、わが国ではこれまであまり検討されてこなかった内容であった。今後は、HIV 感染者の長期予後を見据え、代謝異常についても多面的に研究される必要があると思った。

今回のメインテーマの一つである「教育」について会長の高田先生が自らオーガナイザーとなり、シンポジウム 10 「医療者へのエイズ教育」が行なわれた。シンポジストとして、後藤先生（エイズ予防財団/広島大学病院）、照屋先生（国立国際医療センター）、神馬先生（東京大学）、五味先生（自治医科大学）が発表した。拠点病院の医療スタッフに対する研修システムは出来上がってきているが、学生教育や

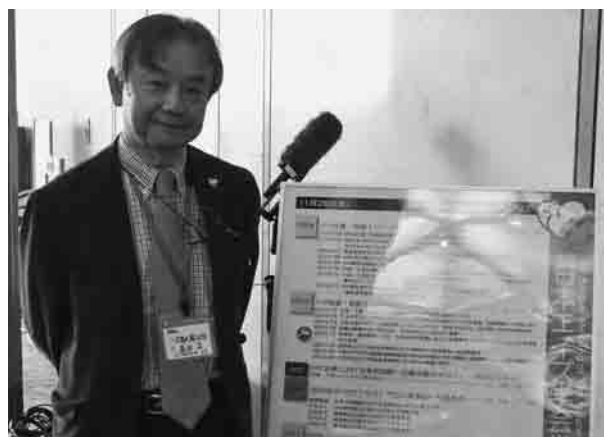


図 1 高田会長と会場内の演題進行が一目でわかるボード



図 2 学会会場で配られていたシンボルマーク「HAART くん」のピンバッチ

卒後研修は多くの問題を残している状況であると感じた。  
**HIV**感染者が増え続けている中で、「医療者へのエイズ教育」を一つのテーマとして学会の場で討議されたことは時

宜を得た、意義深いことであった。今後も学会でこの課題について討議を深め、一定の方向性を示すことが日本エイズ学会にとって一つの使命であると強く感じた。